平成２４年度「特別支援教育総合推進事業（特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究）」報告書

団体名	鹿児島県立鹿児島聾学校
研究開始年度	平成２４年度

Ⅰ　概要

１　指定校の一覧

設置者	学校種	学校名（ふりがなを付すこと）
公立	特別支援学校	鹿児島県立鹿児島聾学校（かごしまけんりつかごしまろうがつこう）

２　研究テーマ

専門高校等との交流授業やデュアルシステムを活用した教育課程の編成

３　研究の内容

（研究内容）

高等部職業学科の特性を活かした人材育成を目指し，生徒の実態に基づいた教育課程を編成・実践してきているが，生徒数減少に伴う集団での学習機会の減少やインターンシップなどの就労体験の不足もあり，十分な成果につながっていない。また，生徒の学ぶ意欲や実態に応じた職業観の育成に向けた取組も十分ではない。

そこで，専門高校や関係機関との交流授業やデュアルシステム導入を検討し，職業観を育成する教育課程を編成することで，働く意義を理解し，意欲的に就業する生徒の育成が見込まれると考えた。

そのため，以下の内容について研究を行うこととした。

○　職業観や学力についての実態把握
○　専門高校や関係機関との交流授業及び実習の実施
○　インターンシップの課題整理に基づく鹿児島聾学校版デュアルシステムの検討
○　インターンシップ，交流授業等を改善した学習内容等の見直しと教育課程編成

（評価の観点及び評価方法）

評価の観点

○　教育課程編成につながる職業観や学力などの実態を把握できたか。
○　交流活動の目標を明確にした専門高校等との連携による交流授業や交流実習を企画，実施できたか。
○　鹿児島聾学校版デュアルシステム導入につながるインターンシップの改善ができたか。
○　生徒の実態を踏まえ，職業観の育成につながる学習内容等の見直しと教育課程の検討ができたか。

評価の方法

○　実態を把握するために実施する客観的な調査等（職業に関する就労支援のためのチェックリストによる実態調査やＣＲＴ「国語，数学」による学力調査）の実施結果により評価する。

○　交流授業の内容や目標の達成度，関係職員との連携の在り方等について，生徒や職員による事後評価や関係職員の反省や課題のすり合わせにより評価する。

○　外部講師招へいや先進校視察等による情報収集及びインターンシップ先の企業からの評価や生徒の反省，職員のアンケート等により，第三者を交えた場で評価する。

○　教育課程の検討に当たり，把握した生徒の実態や交流授業，インターンシップ充実のための課題等の研究内容の反映状況により評価する。

４　研究成果の概要

（研究の成果と課題）

○　職業観に関するチェックリスト実施結果からは，与えられた作業や当番は最後まで行い，協調性はあるが，積極性に乏しいこと，ＣＲＴ学力調査の結果からは，主述の正しい対応のさせ方や語彙の拡充などが全国平均を下回っていることや資料や図を読み取って関係性を理解することが難しいなどの実態が明らかになった。今後は，学力調査等で明らかになった基礎学力を更に定着・向上させるための方法として，共通教科の充実や定期的な学力調査や対外模試の実施等の検討が必要である。

○　集団での学習機会の減少に対応するために，それぞれの学科で学期２～３回程度近隣の高校や専門学校と行った交流授業等により，生徒がふだんとは違う学習環境で集中力を絶やさず，緊張感をもって取り組むことができたり，交流を目的とする交流授業だけではなく，教科の目標を共に達成する共同学習につなげたりすることができた。今後は，共同学習や交流授業の回数や内容，授業を充実させるための事前の細やかな打合せや相手校を会場とする交流及び共同学習だけではなく，本校の施設・設備を活用した交流及び共同学習の検討が必要である。

○　総合的な学習の時間で行っている就労体験的な内容のインターンシップでは，受入事業所から，「聾学校という限られた環境では，社会経験が不足し，一般常識や働く上での基本的な知識の理解が不十分。」，「慣れていない環境では消極的。」などの本校生徒の課題がげられた。今後は，これらの課題を改善するためにも，インターンシップの機会を増やす必要があり，現行の６月だけでなく夏期休業中の実施等を検討する。また，就労体験的な実習だけでなく学校で学んだ専門的な内容の実習を組み込んだインターンシップに取り組むなど内容についても検討していく。加えて，県外での職業に関する体験を取り入れた研修旅行，アビリンピックなど対外的なコンテストへの参加に向けて専門科目等を横断して取り組むことや「鹿児島聾学校版デュアルシステム」につなげる諸実習の内容や単位数の取扱い等の検討が必要である。

○　教育課程の改善に向けて，ＣＲＴの結果で明らかになった基礎学力定着方法の検討，より専門的な内容を生かした実習へと発展させるインターンシップの改善，場や回数・内容等を工夫した交流及び共同学習，職業観の育成につながるコンテスト等に向けた取組，研修旅行の位置付け等の方向性が明らかになった。今後は，研究成果を踏まえた教育課程の編成を行い，評価と改善を継続していくことが重要である。